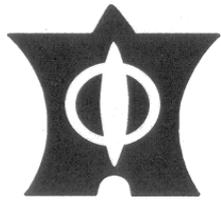


10月号 尼崎市立大成中学校 平成24年10月1日



# 大成中だより

## 可能性への挑戦！！

少し前のことです。イギリスで開かれていた第14回夏季パラリンピック・ロンドン大会が、史上最多の164カ国・地域から約4200人の選手団の参加のもと、20競技、503種目の競技種目を行い、12日間の熱戦の幕を閉じました。134人が出場した日本選手団の獲得メダル数は金5個、銀5個、銅6個の計16個。前回の北京大会の27個には及ばなかったですが、初の金メダルを獲得したゴールボール女子の活躍や、柔道男子100kg超級での金メダル(兵庫県出身)獲得、車いすテニス男子シングルの大会初の2連覇など、死に物狂いで挑んだ結果が現れたように思います。



134人の選手団の中にはあともう少しでメダルに届いた選手が多くいて、4年後のブラジル・リオデジャネイロ大会が今から楽しみになってきます。諦めずに夢を追いかけ、可能性に挑戦し続けている日本選手団の皆さんに大きな拍手を送りたいと思います。

### 一生徒朝礼・集会より(9月18日)

18日(月)に床が真新しくなった体育館で生徒朝礼と生徒集会を行いました。朝会では今や社会問題となっている「いじめ問題」について、よく教材として使われている“わたしの妹”という題材で子ども達に話しました。真剣に聴いている子ども達を見て安堵とともに、身の引き締める想いがしました。

またその後の生徒集会では、生徒会による制服の身だしなみのアピールがあり、全学級で風紀チェックを行いました。全校的に意識が図られたと感じました。生徒会の皆さん、ご苦労さん！

### 一朝礼の話(9月18日)より

今から話すことは、ずいぶん前にある絵本にあった実話です。

『…トラックに乗せてもらって、ふざけたりはしゃいだり、アイスキャンディーをなめたりしながら、私たちはこの町に引っ越してきました。妹は小学校4年生でした。けれど転校した小学校で、あの恐ろしいいじめが始まりました。

言葉がおかしいと笑われ、跳び箱ができないといじめられ、クラスの恥さらしとののしられたりしました。ちょっともきたない子じゃないのに、妹が給食を配ると受け取ってくれないと言うのです。とうとう誰ひとり口をきいてくれなくなりました。

ひと月たち、ふた月たち、遠足に行った時も妹は一人ぼっちでした。

やがて妹は学校へ行かなくなりました。ご飯も食わず、口もきかず、妹はだまってどこかを見つめ、お医者さんの手も振り払うのです。でもその時、妹の体につけられたあざが、たくさんあるのが分かったのです。

妹はやせおとろえて、このままでは命がもたないと言われました。母さんが必死でかたく結んだくちびるにスープを流しこみ、抱きしめて、抱きしめて、一緒に眠り、子守歌を歌って、ようやく妹は命を取り止めました。

そして毎日がゆっくり流れ、いじめた子たちは中学生になってセーラー服で通います。ふざけっこしながら、カ

パンを振り回しながら。でも妹はずっと部屋に閉じこもって、本も読みません。音楽も聴きません。だまってどこかを見ているのです。振り向いてくれないのです。

そしてまた年月がたち、妹をいじめた子たちは、高校生となり、窓の外を歩いていきます。笑いながら、おしゃべりしながら・・・

このごろ妹は折り紙を折るようになりました。赤い鶴や青い鶴、白い鶴、鶴にうずまって、でもやっぱり振り向いてはくれないのです。母さんは泣きながら隣の部屋で鶴を折ります。鶴を折っているとあの子の心が分かるような気がする・・・

ああ私の家は鶴の家 わたしは野原を歩きます。草原に座るといつの間にか私も鶴を折っているのです。

ある日妹はひっそりと死にました。鶴を手のひらにすくって花といっしょに入れました。

亡くなった妹の傍らには一通の手紙が置いてありました。「私をいじめた人たちは、もう私を忘れてしまったでしょうね。もっと遊びたかったのに。勉強したかったのに」・・・』

最近問題になっているいじめ事件と全く同じです。亡くなった少女の家族からの手紙をもとに、絵本作家の松谷みよ子さんが作られた絵本です。「いじめは最低の行為です。」

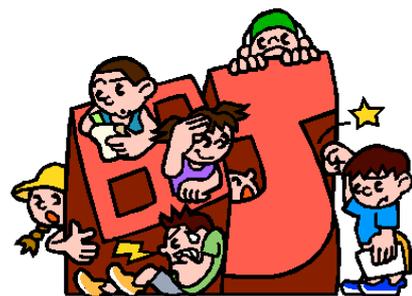
「いじめ」と「けんか」は違います。それは、「理由があるかないか」、「その時だけか長期に渡っているか」、「お互いにやり合っているか一方的にか」、「1対1か1対多数か」など、「いじめ」と「けんか」は全く違います。つまり「いじめ」とは、『自分より弱い人に対して一方的に、体や心を傷つけることをして、相手が一生忘れられないほどすごく嫌な思いをする行為』です。

世の中、気の合う人もいれば、そうでない人もいます。これは当たり前のことです。しかし、気の合わない人を嫌いだ嫌いだと思っている限り、その人の生きる力はしぼんでしまいます。気のあった人だけと付き合うわけにはいきません。いろいろな人がいてそれぞれ支え合いながら、世の中は成り立っています。また、それぞれ違うからこそおもしろいんです。自分にない良い所や、その人の能力に学んだりすることができます。大人も子どもも一緒です。

また、人間は幸せになるために生きています。そのために勉強を頑張ったり、部活や家の用事を頑張っています。その幸せになるための生きる権利を、誰にも止める権利はありません。もし皆さんの中に辛い思いをしている人がいたら、先生や親など、大人に相談をしてほしいと思います。必ずや解決の道筋をつけていきたいと思えます。どうか心に留めて置いてください。今いろんなところで起こっている「いじめ問題」が、一日も早く解決されることを強く願っています。

## －2年生トライやるウィーク(9月24日～28日)－

2年生が5日間の「トライやるウィーク(職業体験)」を無事に終えることができました。この5日間で学校では学べないたくさんの方が学べたことと思います。◎人の役に立つことで嬉しさや喜びを感じられた人、◎一つのことを最後までやり切ることで自信と責任感が身についた人、◎将来の就きたい仕事について考えるよい機会となった人、◎働くことは社会貢献をすることだと気がついた人、◎親の仕事の大変さやその頑張りが少しは分かった人、◎地域の人たちの優しさや温もりが感じられた人、中には直向きに仕事をしている大人の姿を通して、自分の生き方そのものが変わった人がいるかも知れません。であるとすればこんなに嬉しいことはありません。皆さん、本当によく頑張りました。ご苦労さん！



## －名和小学校体育大会(9月29日)－

名和小学校の体育会を見てきました。皆さんも経験があると思いますが、9月の残暑厳しい暑い中、学年演技や全校練習などに一生懸命に取り組んでいた様子が想像できる素晴らしい体育大会でした。保護者や地域の方もたくさん声援に来られていました。40m走に60m走、100m走、各学年学級対抗リレー、団体演技等、本当に見応えのある体育大会でした。

## －中間テスト(10月11日～12日)－

2学期の中間テストです。確かに試験勉強は苦しいですが、たったの二日間です。計画的に勉強ができるに越したことはありませんが、やる気の起こらない時もあるでしょう。でもそんな時も教科書やノートを開いてジッと見詰めることから始めてください。少しずつやる気がフツフツと湧いて出てくることがあります。「分からない、できない、しんどい」と諦めてしまって、できる努力を怠らないようにしてください。怠けることの痛さを知るのは、今の自分ではなく未来の自分です。まずは自分に合った勉強方法を確立して頑張りましょう。



### —文化発表会(10月26日)—

スローガン『煌(きらめき)～いまこそ輝くとき～』、なんと素晴らしいスローガンでしょう。「きらきらと光り輝くこと」、今まさに皆さんのエネルギッシュなバイタリティーあふれた学校生活そのものです。個人のその力を学級に結集して、合唱コンクールを始め、展示発表や舞台発表に臨みましょう。何度か他校の文化発表会を見たことがあります。今からすごく楽しみです。一致団結してがんばりましょう！

次の文章は、ある小冊子に特集として掲載された「宮本延春」さんという方の自伝です。心を打たれましたので掲載します。ぜひ読んでみてください。

……私は16歳で母を、18歳で父を亡くしました。兄弟もなく、養子だった私には親戚もいませんでした。誰ひとり頼れる人もなく、未成年の内たったひとり世の中に放り出され、生活の全てを自分自身で支え、それでも生きなくてはなりません。いじめが原因で学校嫌いになった私の成績はオール1、高校へ進学できる学力も経済力もなく、1ヶ月7万円の給料を得るために、厳しい現場で働く毎日を過ごす中、「なぜ僕は養子に出されたのだろう……どうして自殺未遂に追い込まれるほどいじめられたのだろう……どうして母が父が死ななくてはならなかったのだろう……同級生達は食べるものにも住むところにもお金にも困っていないのに、どうして僕ばかり不幸が押し寄せるのだろう……どうしたら幸せになれるのだろう……」。言葉にできないいらだちを何にぶつければいいのか……希望の持てない未来に何を期待すればいいのか……この苦しみからどうすれば逃れられるのか……ずいぶん長い間悩み苦しんでいました。

程度の差こそあれ、人ならば誰もが悩んだり苦しんだりした経験があるともいます。親、子ども、友人、仕事、恋人、学校、人生、年齢や立場によって、悩みの種はどこにでもあり、きっとあなたにも何らかの心当たりがあるはずで。

そして、この悩みというものは、私の経験上大きく二つに分かれていると受け止めています。一つは「悩んでも何も変わらない悩み」、もう一つは「悩む価値のある悩み」です。

「悩んでも何も変わらない悩み」というものは、明日の天気や、動かしようのない事実などのように、自分の力ではどうにもできないものです。この問題はいくらヨクヨクしてもウジウジ悩んでいても、それだけで結果や現実はいさしも変わりません。余談ですが、あなたは1年前の悩みを覚えていますか……もし覚えていなければ、その程度の悩みだったということです。別の言い方をすれば、時間が解決してくれる悩みだった。そう言えるのかも知れません。仮に今悩んでいることも、1年後に忘れていたならば、立ち止まってひどく悩んで苦しい時間を過ごすよりも、もっと楽しいことに時間を使うか、この悩みを解消するために、できる努力をする方が有意義ではないでしょうか。もし、明日の天気が心配ならば、晴れるかどうか悩むのではなく、雨の時の対策をできる限りすることです。極論を言えば、雨が降ってから考えても遅くはありません。また、過去に起きた出来事も同じように、どれだけ反芻して悩んでも変わることはありません。できることは過去を教訓として未来の自分に生かすことです。悩む時には、「これは悩むことで何かが変わるのだろうか」と自問自答してみてください。おそらくじっと悩むよりも、行動に移す方がよき結果に繋がるはずで。

次に「悩む価値のある悩み」というものは、悩むことで現実に影響を及ぼし、結果や未来が変わる場合です。この悩みは簡単に答えなどでない時もありますが、苦しく辛い気持ちと向き合っているその時間は、人としての器を大きくし、思量を深め、成長している痛み《成長痛》の渦中にある時です。すぐに解決できなくても、

悩むことそのものに大きな意味があります。このタイプの悩みは、正面から向き合い、時には試行錯誤を繰り返して、受け止めて行かなくてはなりません。

私が10代の頃、身に降りかかる不幸や苦しみを、誰のせいによればいいのか、どうしてこうなってしまったのか、何がいけなかったのか、この先どうしていけばいいのか、ずっと悩んでいました。そして気が付いたのです。人生に起こる様々なことは、「努力して解決できるものごと」と、「努力しても解決できないものごと」がある。むべきは後悔や怨みではなく、解決できる問題に対して、どのように努力していけばいいのか、その術だったのです。

宮本さんは中学校卒業後大工の道に進み、その後建設会社に就職。24歳の時に地元の定時制高校に入学。27歳で大学に入学後、大学院理学研究科博士課程修了。36歳で母校の定時制高校の先生になりました。—宮本さんの自伝に強く心を打たれました。そして、変えられないものを受け入れる冷静な心と、変えられるものを変えていく努力と、その両方を見分ける知恵を身につけることの大切さを教えられました。



### 【10月の行事予定】

1 月	3年生高校説明会 6H	18 木	アルミ缶・牛乳パック回収
3 水	尼崎市中学校全体教科研究会	19 金	アルミ缶・牛乳パック回収 合唱コンリハーサル
4 木	3年生高校説明会 6H	20 土	土曜チャレンジ 尼崎市中総体
6 土	土曜チャレンジ	22 月	オープンスクール ~26日
11 木	中間テスト	24 水	学年別合唱コン
12 金	中間テスト 生徒集会 4H	26 金	文化発表会
13 土	土曜チャレンジ	27 土	土曜チャレンジ
15 月	合唱練習開始	29 月	生徒朝礼
17 水	創立記念日	31 水	芸術鑑賞会